

熊事蹟

〔古事記神武〕故神倭伊波禮毘古命紀伊國從其地男水門廻幸到熊野村之時大熊髮出入卽失爾神倭伊波禮毘古命倏忽爲遠延及御軍皆遠延而伏遠延二字以音〔扶桑略記二十三卷書〕延喜二年九月七日庚戌西京不意熊出來咋損人卽於淳和院北邊被射殺

四年十一月六日丙寅熊入來左衛門陣卽捕繫

〔愈の須佐美追加上〕薩摩の獵師にや有けむ山路を通るとでかけ道をふみはづし谷底へ陥り幸にあやまちはせざりけれど絶倒しけるを大なる熊出て掌を口に當てすりければをのづから嘗めけるが甘き事限りなしさて有て熊先に立てゆきけるに付て住ほどに窟の中に入ぬ草を置てその上にをらしめいたはる體に見へ時々掌を出候て舐らするに飢る事なかりけり明日歸べきと思ひ人に暇こふ如して出けるに熊はなごりおしげに見へてのぼるべき路まで案内して別れ去げり此者不仁なる者にや其のち鐵砲を持つかの道よりつたひ下りてかの窟にゆき熊の臥居たるを打ころし膽を取て奉行所に捧しにそのしだいを尋られて中將綱久朝臣聞たまひ獸さへ人の難義を救ひいたはりしに其恩を不知のみならず是を害せしとて人にして獸にをとれりかゝる者は世のみせしめなりとて其窟の前に磔に行れけり

〔關田耕筆三〕山獸の中には熊は人に馴安きもの也華山のさき牛尾道と三條への別路に菓賣女のかり初に出居るが熊の子をつなぎたるをおのれ立よりて見て其菓物を買て熊に與へたれば女うまいと申せといふ聲に隨ひてうなりたるいかにもうまいと聞ゆ幾度も同じ伊吹山よりいまだ乳をのむものを人のとらへ來るを買て初は物を嚙てあたへしに今は三とせになれりといひしが猶小なりし旅人來あひて是は大にして觀場の料に賣んとにやといひしに女いなく養ひて何かは賣べき生涯飼ひぬべしもとより是がために物買かふ人も多しといはれて旅人は得ものいばざりき殊勝のこたへ也と思ひてわすれず